

# 松本清張と井上靖の「登山」表象

——『遭難』と『氷壁』におけるメディアへのまなざし

尹 苙汐

## はじめに

松本清張と井上靖は、1950年以降の日本文学に言及する際に欠かせない作家である。彼らは同じく芥川賞を獲得した作家であり、その作品における文学性が高く評価されている一方、性別や年齢層を問わず多くの大衆読者から愛され続けた。それゆえに、二人の作家とも1960年に起きた「純文学論争」に巻き込まれたわけである。しかし、松本清張と井上靖の文学を比較する研究はそれほど見当たらない。それは、井上靖の文学が古代中国とりわけ西域を舞台にした歴史小説に焦点化されたのに対し、松本清張の文学が日本を舞台にした推理小説と歴史小説に集約されるなど、物語の内容に交差がほとんどないからであろう。しかし、二人とも作家となる以前は新聞社で勤務した経験があり、そのため、社会問題やマス・メディアに対する鋭い視線、および読者の関心を正確に読み取る力が、彼らの初期作品には共通してよく現れている。

井上靖の長篇小説『氷壁』と松本清張の中篇小説『遭難』は、そうした二人のジャーナリスティックな特徴を照らし合わせるような作品である。『氷壁』は1956年2月24日から1957年8月22日にかけて『朝日新聞』に連載され、1957年10月に新潮社より単行本が刊行されてから、二年連続でベストセラーとなっていた<sup>1</sup>。『遭難』は、一年半遅く、1957年10月5日から12月14日までの『週刊朝日』に、『黒い画集』シリーズの第一篇目として連載され、1959年4月に光文社より刊行された単行本『黒い画集1』に収録されている。両作品とも当時の日本における「登山ブーム」および多発した遭難事故を背景にして書かれた小説である。それだけではなく、作品を同時代の文脈においてみると、二人の作家とも当時の登山と遭難をめぐる様々な言説をそれぞれ独自に解釈して作品に取り込んでいることがわかる。『遭難』と『氷壁』において、松本清張と井上靖はどのように1950年代の登山をめぐる世論と山岳文学を吸収し、いかにして独自の創作を行ったのか。そこから読み取れる彼らと同時代のメディアと文学の関係はどんなものか。本論は、『氷壁』と『遭難』を通して考察することを試みる。

## 1. 『氷壁』と『遭難』の作品と評価

『氷壁』は、1955年1月2日に前穂高にて、登山者がナイロン・ザイルの切断によって遭難死した事件をモデルにして書かれた小説である。モデルとなった事件は、1955年1月3日あたりの『読売新聞』から知ることができる。

<sup>1</sup> 『出版データブック』(改訂版)、出版ニュース社、2002年5月、30-31頁。

「困難な救助作業 前穂高遭難、応答絶えた若山君」

【松本発】元旦早々北ア前穂高岳(三〇九〇メートル)頂上直下で遭難、行方不明となった三重県鈴鹿市岩稜会員若山五郎君(一九)(三重大学一年生)は現場から猛吹雪に包まれ北ア特有の酷寒などから生命は絶望視されている。(略)<sup>2</sup>

2  
『読売新聞』、1955年1月5日、6版「中京読売」、8頁。

3  
『読売新聞』、1955年1月6日、6版「中京読売」、8頁。

4  
「ナイロンザイル事件」の経緯は、『氷壁・ナイロンザイル事件の真実』(石岡茂雄、相田武男、あるむ、2009年)を参考にしている。他に、1976年12月9日の『朝日新聞』(東京・夕刊)の報道紙面でも確認できる。

5  
「氷壁」について、井上靖、『井上靖全集 第十一巻』、新潮社、698頁。

6  
「解説」、佐伯彰一、『氷壁』、新潮文庫、1963年、632頁。

7  
「氷壁」論—「孤独」と「信頼」—、高木伸幸、『井上靖研究序説—材料の意匠化の方法』、武蔵野書房、104頁。

8  
「報告書『ナイロン・ザイル事件』の活用—「氷壁」補考—」、高木伸幸、『井上靖研究序説—材料の意匠化の方法』、武蔵野書房、159頁。

翌日の同じ紙面に、「若山君がスリップしてザイルが切れ遭難したものとわかった」<sup>3</sup>という報道が行われた。後に、遭難者若山が所属した岩稜会がザイルの切れたことに疑問を持ち、会長の石岡繁雄(若山の兄でもある)をリーダーとして実験を行い、ザイルの品質に問題があることを訴え続けたが、肉親であるため石岡繁雄の実験は世間の信用を得られなかった。一方、大阪大学教授の篠田軍治の指導で名古屋大学工学部において公開実験が行われ、ナイロン・ザイルは麻のザイルよりも切断しにくいという結論が出されたため、石岡と岩稜会が非常に不利な局面に陥った。その後、石岡は半生をかけて実験活動と告訴を行い、ようやく1975年6月に、ザイルに問題があるという訂正を得られた。これがいわゆる「ナイロン・ザイル事件」である<sup>4</sup>。

井上靖が、「三笠書房の編集長で登山家である長越茂雄君から、北アルプス前穂高岳で発生した遭難事件の話聞いた。話を聞いた時、直ぐ書きたいと思った。事件を書きたいのではなく、事件は単なる材料として借りて、その事件をめぐる人々の、それぞれの立場における心理の動きをフィクションとして書いてみたいと思った」<sup>5</sup>と述べているように、『氷壁』は「ナイロン・ザイル事件」が小説内容の主幹となるが、主人公魚津(「ナイロン・ザイル事件」の遭難者若山の登山仲間石原国利がモデル)という人物像の描写にもっと重心が置かれている。小説『氷壁』は、ナイロン・ザイルの切断によって仲間小坂を喪った魚津が事故の真相を究明して世間に伝えようとする過程を描く物語となるが、その中に、小坂が恋していた人妻の美那子と魚津とのメロドラマも織り込まれていく。佐伯彰一が新潮社刊文庫本の解説に「自然対都会、孤独な全身の行動対無意味に錯雑した「人事関係」という対立が、結局のところこの小説をつらぬく劇的な基軸なのである」<sup>6</sup>と評していることや、高木伸幸が「登攀中にナイロン・ザイルが切れパートナーの小坂乙彦を喪った登山家の魚津恭太が、「世俗」の中で事件に対する様々な憶測に取り巻かれながらも「孤独」に耐え人間を「信頼」する姿を通して、〈アルピニズム〉に徹した一つの生きる姿を描き出した小説かと思われる」<sup>7</sup>と論じているように、小説『氷壁』は主人公魚津と「世間」との対立を通して、純粹なるアルピニズム精神を持つ登山家かつヒーローの逸脱した人生を描いた物語として読まれている。また、高木伸幸は、岩稜会による『ナイロン・ザイル事件』や石岡茂雄のインタビューを通して、小説『氷壁』にモデルがいかに取り込まれたかを検証し、実際の「ナイロン・ザイル事件」より、小説の中でナイロン・ザイルの切断に対する世間の注目が強調され、主人公魚津にかかった疑惑が拡大されたことによって、「「孤独」を作者は一つのモチーフとして描いていること」<sup>8</sup>を主張した。

小説『氷壁』の解釈の中心として、以上の先行論に述べられた主張が最も正しいと言える。しかし、なぜ「ナイロン・ザイル事件」が『氷壁』のモデルになり得たのか。『氷壁』に起きた遭難事故の事件性そのものは、小説の中でどのような意味を持つか、また、登山家を描くのになどどのような役割を果たしているのか。こうした問題意識を

持ちながら、松本清張の『遭難』を見てみよう。

『氷壁』に対して、『遭難』は特定したモデルをもとにして書かれた小説ではなく、同時代に多発した、より一般的な遭難事故が背景となっている。松本清張は「遭難がしきりと新聞に出るようになった」<sup>9</sup>時期に、「それらの記事を読んで、その中に人間の作為的な遭難もあるのではないかと疑ったことが小説の書かれるきっかけである。小説の梗概を述べると次のようになる。銀行員岩瀬秀雄が登山者であり銀行支店長である江田昌利と後輩の浦橋吾一と三人で鹿島槍に登攀する際に、悪天候に遭遇し、疲労と寒さのために遭難して死亡した。浦橋が雑誌『山嶺』に発表した手記を読み、岩瀬の従兄である榎田二郎は江田昌利に遭難地まで案内するように依頼したが、二人の登山過程において、榎田が事件の真相を解明していく。江田が自分の妻と不倫をした岩瀬を山で遭難死させたのが事件の真相だと、榎田は解明した。しかし、結局榎田も江田の作った落とし穴に落ちて死んでしまう。

『遭難』は中篇小説であり、連載当時に『氷壁』ほど爆発的な人気を呼び起こすことがなかったが、掲載誌『週刊朝日』に多数の読者投書が寄せられ、また、『氷壁』と同じように多くの登山客が現地を訪ねる原因となったことがわかる<sup>10</sup>。藤井淑禎は、清張ミステリーの優れたところを、「時代の鮮やかな取り込み、読者への懇切きわまる助言・情報の提供、小説としての優れた構成員」という三つの点にまとめ、『遭難』は三つの特徴を「いずれも濃厚に具備している」と評価した<sup>11</sup>。『毎日新聞』による「読者世論調査」と同時代登山ブームにあった遭難の実態に関する資料を考察することを通して、藤井は、小説『遭難』の人物と環境設定、また登山と遭難という題材など、いずれも『週刊朝日』の読者が「ピンとくるものばかりであり」、「遭難」という小説が丁寧に同時代の「実態に即して書かれていた」と述べた<sup>12</sup>。小説『遭難』は登山ブームが起きて遭難事故が多発している1950年代に書かれて、同時代の実態をリアルに描いたため、読者にとって受け入れやすいという点は確かにその通りである。

しかし、小説は単に時代を反映するように創作されただけではない。『氷壁』についても同じように、作品が戦後第一次登山ブームにうまく乗り、またブームに拍車をかけたこと、綾目広治が指摘している<sup>13</sup>。加えて、高木伸幸が「『氷壁』は、〈遭難もの〉と言い得る小説であり、この小説が連載され、出版された当時の社会の空気とその点において見事に合致していた」と論じた<sup>14</sup>。高木によると、山で不幸な事件を繰り返さないための〈遭難もの〉(遭難手記、遭難報道や遭難を題材にした映画などを含む)は、「凄絶な死の記録でありながら、作者のやや興にまかせた筆致も影響し、多くの人々から、その悲壮美とも言うべき死への憧れさえ抱かせる読み物として享受されていった」のである<sup>15</sup>。

しかし、『氷壁』と『遭難』はただ同時代を反映し、同時代社会の空気と合致しただけではないというのが筆者の見解である。二つの作品とも、遭難事故の「事件性」なしでは成立しない小説である。推理小説の『遭難』はもちろん事件の解決を中心に展開する小説であるが、『氷壁』の場合、いかに主人公の登山過程が詩的に描写されたとしても、「ナイロン・ザイル事件」の解決をめぐる懸念こそ、小説『氷壁』が最後まで読者の興味を引くために重要な役割を果たしたと考えられる。『遭難』と『氷壁』は、遭難事故に「事件性」があった故に、事故にまつわる人間関係や証言の交錯が前面に打ち出

9

『黒い画集 書き残したこと』、松本清張、『週刊朝日』、1960年6月25日号、30頁。

10

『週刊朝日』1958年12月7日号の投書欄に、「『黒い画集』と地元」という投書が長野県松本市の会社員から寄せられた。1957年に井上靖の『氷壁』によって登山者が殺到したのに続いて、1958年『遭難』の連載後にまた長野県松本市観光課に多くの登山客が訪ねて来たが、遭難事故を防ぐために登山者に「もっと体を大事に」を伝えたいという主旨で投書である。

11

藤井淑禎『『遭難』の内と外—『週刊朝日』と『黒い画集』』、松本清張研究、北九州松本清張記念館、2003年。

12

同上。

13

『『氷壁』論—登山の倫理と資本主義の精神—』、綾目広治、『井上靖研究』、井上靖研究会、2005年。

14

『井上靖文学における大衆性—「氷壁」に描かれた遭難を通して—』、高木伸幸、『近代文学論集』第35号、日本近代文学九州支部、2009年11月、111頁。

15

同上。

されている。松本清張と井上靖は、それぞれ異なった見解を持ってそうした人間関係と証言の交錯を描いた。そうした描写を分析することを通して、同時代の「アルピニズム」とメディア社会に対する作家のまなざしが明らかになってくる。

## 2. 「登山ブーム」と山岳小説—ミステリーの意味—

1950年代における「登山ブーム」とはいったい何を指すのか。当時の登山人口が大量に増加したことをまず確認しておくべきであろう。1958年1月21日の『朝日新聞』（朝刊）に「登山人口 夏どっと50万人」という記事が掲載された。調査によると、1955年東京都民21人に対して1人の割合で登山が行われ、1956年は15人に1人、1957年には7人に1人の割合に至ったという。同記事には、『氷壁』などの文学作品が登山人口の増加に拍車をかけたことも言及されているが、それはさておいて、上述した記事は必ずしも正確な数字を記録したとは言えないが、登山人口が急増する一面をうかがうことができよう。しかし、それは単に「登山ブーム」の一角でしかない。

マス・メディアに登山に関連する記事が次第に増加するとともに、山岳書（案内、紀行など）や山岳雑誌が多く刊行され、登山の話題を扱う小説や映画が増え、様々な言説空間に登山が語られていった。1950年から1959年の『朝日新聞』に「登山」というキーワードを含む記事は948件も書かれているが、その中で、エベレスト登頂に関する報道が多いため、1953年が185件でピークになり、そこから毎年少しずつ減少してから、また1959年に日本のヒマラヤ登攀によって154件まで増えた。遭難に関する報道は、1956年まで十件未満の状況が続いていたが、1957年以降に増加し、1959年に35件に至った<sup>16</sup>。山岳者の世界で、1958年に『岩と雪』（山と溪谷社）と『アルプ』（創文社）などの雑誌が創刊されたことや、その前から山岳書が多く刊行されていたことも、「登山ブーム」を構築する事項としてあげられる。また、マス・メディアと山岳者の世界は重なる部分も少なくない。例を挙げれば、1955年1月3日から9日まで『朝日新聞』に連載された山岳者のエッセー集「冬山春粧」<sup>17</sup>のように、山岳者の言説がマス・メディアを通して一般読者の目に届く。また、翌年7月15日に同紙において、「案内から小説まで 今年の夏枯れ救う 登山ブーム」という記事が以下のように語る。

—ことしの山はどこも大変なにぎわいだっているが、山の本の方もたくさん出るね。売れているの？  
—まあまあだが、夏枯れどきの出版界ではありがたいのさ。（中略）  
—経験はなくても山登りの本は読んでるだけで楽しいもの。（以下略）

この記事は、同時期に刊行された山岳関係の本を紹介するものである。山の案内書はもちろん、山岳小説も読者に人気であるようだった。マス・メディアと山岳者、文学者の言説の交錯によって、世論としての「登山ブーム」が形成されたのである。1950年代の日本は、高度成長期の入り口に立っている。経済の回復と技術の進歩は「登山ブーム」の発生を支える根底である。では、山岳文学、とりわけ山岳小説はこう

16

朝日新聞記事データベース「聞蔵II」を通して検索した結果である。

17

「冬山春粧」、黒田初子、藤木九三、浦松佐美太郎等、『朝日新聞』（夕刊）、1955年1月3日～1955年1月9日。槍ヶ岳、御岳、穂高岳などの山岳を、写真一枚付きで、作者の登山過程を記録したものである。

した「登山ブーム」においてどのような位置づけができるか。

近代日本の山岳文学は、よく知られている志賀重昂の『日本風景論』(1896年)など、明治期まで遡るが、アルピニズムの登山紀行と遭難手記は大正期からである。その歴史の流れは江本隆司の「山岳紀行・遭難手記」<sup>18</sup>に詳しく記述されている。1950年代の山岳文学の特徴は、外国山岳小説が多数翻訳され、日本でも山岳小説が多く書かれるようになったことである。朋文堂が刊行した『山岳文学選集1-10』(1957年-1959年)と白水社の山岳図書がその典型であるが、収録されたものを山岳紀行、遭難手記と山岳小説など、いくつかの種類に分けることができる。山岳紀行や遭難手記と異なり、山岳小説にはミステリーの要素が多く含まれる点を指摘しておきたい。

外国の山岳小説には、墜落した飛行機に隠された金を探すために山を登っていく兄弟の物語を描いた『喪の銀嶺』<sup>19</sup>や、登山仲間の二人を死なせた伯爵をめぐるサスペンス『ザイルの三人』<sup>20</sup>などの名作があるが、翻訳された数が多いためすべてここに列挙することはできない。日本の場合、新田次郎は106点もの山岳小説を創作したことによって、山岳小説の代表的作家とされているが、実際の遭難事件を題材にした『八甲田山死の彷徨』など、事件を取り入れて推理を行う作品も少なくない。

山岳小説とミステリーとは相性がいいということを確認したい。ミステリーは、日常の中に一石が投げられて事件が起こるか、日常から離れた場所で事件が起こり、そして、「知られていないこと」が解明されて「知られるようになる」ことを書いたものである。山岳はそうした非日常的な空間の究極の形である。もちろん、登山は山ですべてが完結する行為ではなく、登山準備(日常的空間)―登山過程(山、非日常的空間)―下山、報告など(日常的空間)という一連の空間的転移の中で進行しているが、登山する前と下山した後の過程は、容易に見られることができるのに対して、登山過程は、険しい地形や不安定な天候によって危険が伴い環境において、人に見られていない中で進行するだけに、ミステリーを生産する可能性が大きい。

特に、遭難事故が起きた場合、登山者グループが主となる救助隊が現場に進入することができるが、その接近の過程にきわめて高度な技術が必要となり、一般者は簡単に事故の様子を知ることができない。生還者がいる場合、事故に関する証言を語る権利がまず生還者に与えられる。生還者がいない場合、事故は死体や物的証拠によって推測され、語られる。しかし、険しい山の中で証拠を見つけることも困難なため、「証言」が重要な、あるいは唯一な鍵となる場合もある。「証言」の扱い方が親族や救助隊、マス・メディア、警察などの立場によって異なってくるため、事故に関する「語り」も多様になってくる。様々な語りが関係し合い、事故の真実を解明する過程においてもミステリーが生産される。

山岳小説がミステリーとして創作される可能性が大きい一方、同時代における読書の趣味も、ミステリーを好む傾向があった。いわゆる週刊誌時代と言われる1950年代に、多数の週刊誌が競争しあう状況の中<sup>21</sup>で、日本のマス・メディアと知の空間も変容しつつある。新聞に報道された事件を、さらに取材して、事件の裏にある真相を究明するような方法論が週刊誌によって行われていた。出来事の更なる裏付けに興味を持つ読書習慣が週刊誌メディアの拡大によって形成されたが、同じく、テレビの普及によってもそうした傾向が強まった。そうした中で、ミステリーを創出するの

18

「文学史にない文学史」に収録、榎本隆司、『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、1967年11月号。

19

『喪の銀嶺』、アンリ・トロワイヤ、近藤等訳、白水社、1956年5月。

20

『ザイルの三人』、ミュラー、妹尾韶夫訳、『山岳文学選集9 ザイルの三人』、朋文堂、1959年。

21

『週刊誌風雲録』、高橋呉郎、文春新書、2006年。

適切な文学様式として山岳小説が人気を博した。それに加えて、登山ブームの中で、登山人口が増加したことと山岳に関する知識が書籍、新聞、雑誌によって大量に伝えられたことも、山岳小説の受容の基礎を築いた。

ミステリーとして書かれたことが多い点は、山岳小説と山岳紀行・遭難手記との違いである。しかし、山岳文学に属するこれらの形式は、いずれも「アルピニズム」の思想に沿ったものであるということを示唆すべきである。アルピニズムとは、近代ヨーロッパで発祥した、山を登ることそのものを志向にした登山およびそうした登山に関連する思想のことである。山岳者千坂正郎の「アルピニズム」に、アルピニズムの登山は、「肉体的感覺的遊戯のためにのみあるというのではなく、人間の根源的欲求に基づいた行為である」と指摘し、なぜなら、登山は、登山は機械文明によって失われた人間の主体性を奪還し、人間の個体の「解放」を求める行為だからである<sup>22</sup>。山岳小説は、こうしたアルピニズムの精神を受け継いで、登山者がいかに機械文明を象徴する都会、あるいは「世間」の束縛から解放され、山の中で真の自我を実現するという常套がある。

先に述べたように、遭難事故が起こると、救助隊やマス・メディアなどが寄ってくる。そこで、非日常的、都会と断絶された山の空間は、日常的な都会の空間が、関係者や証言によって接点を持つようになる。『遭難』と『氷壁』は、このような接点に焦点を当て、遭難事故を語る／語られる人間の内面を観察し、同時代のメディア社会と人間との葛藤を描いた作品ともいえる。しかし、『氷壁』が登山者とマス・メディアの対立を描き、マス・メディアと「世間」を批判し、登山者の「逸脱」で物語を完結させた点において、「アルピニズム」の思想に沿った山岳小説の常套となってしまう。それに対して、『遭難』は、新聞報道と登山者による遭難事故の「語り」を覆し、遭難事故の裏にある殺人事件を探る物語を通して、「アルピニズム」に対する懐疑的姿勢を見せたのである。

### 3. 『氷壁』と『遭難』 — 誰が真実を語るか —

『氷壁』と『遭難』は、遭難事件を解決／解明する物語でありながら、遭難事故を語る多数の語りの交錯・衝突の中で展開される物語でもある。「ナイロン・ザイル事件」をモデルにした『氷壁』において報道メディアが批判的に表象されたのに対して、『遭難』は、さらにユニークな形でメディアを取り込んで物語を構築している。

『氷壁』では、小坂の死を目撃した魚津が遭難事故の目撃者として設定されている。つまり、遭難の真実を知る唯一の人物である。救助が失敗して、東京に帰る電車の中で、魚津は事故を報道する新聞記事の社会面を目にした。その時に、

どうしてもその記事が、小坂乙彦が死んだこんどの事件を取り扱っているものとは思われなかった。どこにも小坂という一人の人間の死については語られていなかった。それについてのひとときの悲しみもなかった。そこで問題になっているのはまったくほかのことであった。<sup>23</sup>

22

「アルピニズム」、千坂正郎、『岳人』、1958年7-10月号連載。

23

「氷壁」、井上靖、『井上全集第十一巻』、新潮社、484頁。

という感想を、魚津が受けた。遭難事故の直後、新聞メディアがすぐに関心を寄せたのは、小坂が死亡したことではなく、読者の注目を集められる話題、ナイロン・ザイルである。その後、魚津の自宅や彼の所属している新東亜商事に、新聞記者の取材が駆けてくる。偶然にもナイロン・ザイルのメーカー佐倉製網は新東亜商事の客であるため、佐倉製網は魚津に「切れた原因はまだ判らない」や、「操作上に欠陥があったかもしれない」などと新聞に発表させるように、新東亜商事に圧力をかける。それに対して、魚津はあくまで真実を究明しようとし、「前穂東壁に友をうしなう」という題で、「大新聞の一つであるK新聞の朝刊学芸欄」に随筆を寄せた。この時に、ナイロン・ザイルに対する疑惑と当事者の小坂の技術的ミス、魚津が「保身のために殺害」したのではないかという疑惑等々、様々な疑惑があった。しかし、ナイロン・ザイル実験が行われ、ナイロン・ザイルの強度が証明され、それが幾つかの新聞の社会面に発表されたことによって、魚津は窮地に追い込まれた。

魚津は、他の山岳者と再び穂高を訪ねて、小坂の死体と切れたナイロン・ザイルを見つけた。美那子の努力も加えて、魚津はようやく他の研究者に再実験を行ってもらい、ナイロン・ザイルが人為的ではなく、地形や紫外線によって切れる可能性があるという結果を証明した。しかし、この実験結果を新聞社に持ち込んだ時に、次の会話がなされることになる。

「ちょっとニュースとしては弱いでしょうね」

「弱い?!」上山の言葉は魚津に意外だった。

「だって、君、この間はザイル事件としてあんなに大きく取り扱ったじゃないか」

「あの時は取り扱いましたが、いまとなつては古いと思うんです」

「古い?!」

「古いというより弱いですよ。もう世の中の方は、魚津さんの事件を忘れていきますよ。」

(中略)

「第一、ニュースになりませんよ。社会面でなくて、運動欄に取り扱う手もありますがそれにしても。。。」

これは、主人公の魚津にとっても、読者にとっても意外な結果でもあるが、よく考えたらおかしくもないだろう。マス・メディアの新しい話題ばかり追う性格は、佐伯彰一が「浮気女の薄情さ」<sup>24</sup>と評している。小説に最後に至ってもなお、「ナイロン・ザイル事件」の真相は世間に知られなかった。物語の結末として、魚津が遭難してから、週刊誌の二頁の記事に、魚津という人間と彼の遭難における新たな疑惑に関して、山岳者や魚津の友人の談話が掲載された。

以上のポイントを中心に読んでみれば、『氷壁』において、ある遭難をめぐるマス・メディアの報道の流れも、一つの物語として完結していると気づく。しかし、実際の「ナイロン・ザイル事件」を報道する1955年あたりの新聞を見ると、作品の中とかなり差異があることもわかる。事故発生後の1955年1月4日、5日は、『朝日新聞』にも『中日新聞』にも、また『読売新聞』の「中京読売」の頁にも遭難を伝えた短い記事があった

24

「解説」、佐伯彰一、『氷壁』、新潮文庫、1963年、632頁。

が、「ナイロン・ザイル 再検討の必要あり」のように、ナイロン・ザイルの問題に注目したのは、『信濃毎日新聞』（1月5月）のような地方紙だけだった。作者は、あえてマス・メディアの功利主義と浮気性を拡大し、その虚偽性を批判して、山岳者としての魚津の言説の真実性を強調しようとしたのだろう。

25

『氷壁』、井上靖、『中間小説の黄金時代』、日本経済新聞社、2006年、325頁。

『氷壁』という作品に、「ナイロン・ザイル事件」をどのように取り込んでいるかについて、井上靖は、「登山家ではないので、雪の穂高で起った事件について、いかなる判断もすることはできなかった」<sup>25</sup>。しかし、当事者の石原国利に会い、「でも、実際に切れたんですからね。という短い言葉を繰り返しているだけの青年の眼には、いささかの濁りもなかった。私は氏の言うように、ザイルは切れたのに違いないと思った」<sup>26</sup>と述べた。『氷壁』の中でこの登山者を信じようと決めた。作品においては、井上靖は石原国利に対する信頼を、魚津に託して、彼に真実を語る立場を与えた。

26

同上、325頁。

実際に、遭難事故を語る際に、山岳者の手記が非常に権威的であり、疑われる余地が少ないのである。登山を神聖なる行為とする山岳者、遭難事故を人為的な殺害事件と考えるわけがないということも想像に難くない。作品『氷壁』の中では、山岳者の語りとマス・メディアの語りとは、はっきりした二項対立を成している。真実を語る言葉と、偽りのある言葉（なんらかの利益関係による結果）との二項対立とも言えよう。

では、松本清張の『遭難』において、「真実」はどのように語られたのか。『遭難』の場合は、より巧みな構成で新聞メディアと登山手記を織り込んでいる。物語の構成を見ていくと、次のようになる。

- 1 事故に関する新聞記事。
- 2 山岳雑誌に掲載された浦橋の手記。
- 3～8 岩瀬真佐子、横田二郎が江田を訪問。横田と江田の登山、真相の解明。

1において、作者は新聞報道の形をそのまま加筆せずに入れた。また、2に長々と書かれた手記も、ベテランの登山者ではなくて、新人浦橋によるものである。なぜここで「新人」として設定されているのだろうか。おそらく、それは浦橋自身が気づかない、ベテランの横田に見破られるための、また、読み手を「誘導」するための仕掛けが隠されているからである。

例えば、手記の記録によると、「私たちよりははるかに身体が頑丈で、いつもその丸っこい顔に鮮やかな血の色をみなぎらしていた」岩瀬君は、登山する時「非常に大儀そうに見えた」。江田も、登山中に丁寧すぎるほど二人の面倒を見ていたのに、岩瀬の異常に関して適切な処置を行わなかったことや、必要な地図を持たないことなど、彼の慎重さと矛盾する行動を繰り返す。手記の裏にもう一人の語り手が隠れており、江田の怪しさを見せ掛け続ける。その怪しさは、小説の3の部分において解明されていく。小説『遭難』は、「完全犯罪」となった江田の殺人を、横田という人物を借りて真相に迫ることにより、読者を事件の中心へと導く。一歩先に進んで、事件の中心に立つ人間そのものを見つめる方法によって、事件を語るのに権威性を持つ専門雑誌のメディアを覆す形で物語を完結させた。

このような、「新聞の報道—専門雑誌の記述—事件解決の実行」という構造を通し



て、新聞であれ、山岳雑誌であれ、どれも絶対的に信用できるものではないという作者の見方が伝わるのではないか。現代の複数のメディアによって記号化された情報を目の当りにする際に、そうしたメディアの権威性を懐疑的に検証しようとする松本清張の野心が『遭難』の物語構造に隠されている。

『遭難』の中で、新聞記事は真実に迫ることにほとんど意味を持たず、たんに事故の発生をいち早く伝えるだけの役割を持つ。そして、「山岳者」が必ずしも真実を語るわけではない。『黒い画集』の連載が終結した際に、清張は「書き残したこと」に次のように語った。

（前略）遭難がしきりと新聞に出るようになった。私はそれらの記事を読んで、その中に人間の作為的な遭難もあるのではないかと疑った。山でのパーティの事故は、それが自然発生的なものか、人為的なものか、区別が容易ではない。もし人為的なもの、例えば、過失致死に値するようなものがあれば、その過失はまた人間の作為とは紙一重の差であろう。私は登山家にいろいろ訊いた。すると多くの登山家はこう答えた。

「岳人には悪い人はいない」と。

崇高な言葉である。しかし、この格言めいた言葉は公式としては通用するが、個々の人間の場合には必ずしもそうではあるまい。いや、この公式的な言葉の陰に隠れた個の悪が潜んではいないだろうか。すべてがそうであるように、公式的な言葉ほど観念的に危険なものはない<sup>27</sup>。

登山ブームの中で、様々な言説によって「アルピニズム」がロマン主義的に粉飾されたというように、清張が考えたのではないか。そうした観念的な認識の裏側に隠された危険と人間悪を、清張が探ろうとしている。清張が「黒い画集—書き残したこと」に、「私は『遭難』を北アの鹿島槍に取った。最初、穂高という話もあったが、井上靖氏の「氷壁」が出て評判になったときでもあり、それを避けた<sup>28</sup>と述べている。題材の扱いについて清張は触れていないが、『氷壁』を意識していないことは考えにくい。『氷壁』より一歩遅れる作品であるが、『遭難』は、ロマンチックな登山物語を作った『氷壁』を裏切るような山岳者の姿を描いた。

遭難した岩瀬を「殺害」した江田はベテランの山岳者であり、アルピニズムの思想からすると、山に敬意を持ち、山を「汚れる」行為を為さない人物であるべきである。しかし江田は妻と岩瀬の不倫の故に、岩瀬を山へ連れ出して死なせた。アルピニズムの登山行為において、人間と山との関係は世間からの干渉を許さない。しかし、「遭難」に描かれたのは、人間の山への愛情でもなく、人間の山との戦いでもない。世間でありふれた「人事関係の渦」が山に持ち込まれて復讐が行われた物語である。

また、真相を追求しようとする榎田も、理想化された山岳者として描かれていない。榎田と江田の登山の場面において、語り手は江田を観察しながらも、時に江田の内部に入り込み、二人の心理活動が前景化されていく。慎重に試しあいながら心理的対決をしていく中で、二人ともお互いの思いを了解したのである。そこで、物語は、誰が殺したか、どう殺したかをめぐって展開するのではなく、「探偵」である榎田と殺人者

27

『黒い画集—書き残したこと』、松本清張、『週刊朝日』、1960年6月25日号、30頁。

28

同上。

江田のどちらが対決に勝つかをめぐって展開するのである。真相が解明される直前になって、「岩のようにかまえていた」、落ち着いた横田がだんだん興奮状態になる。一方、これまで横田の冷静なる推理の前で段々と萎縮していた江田は、その横田の「変化と崩壊」に、「急速に回復」に転じて、興奮状態で油断し始めた横田を「遭難」させた。横田は、『遭難』の中で、もっとも山岳者らしい人間として描くことができる人物であるはずだった。しかし、清張はそうは描かなかった。横田は最終的に、「人事関係の渦」の中で、江田と試し合いながら、心理的戦いの勝者となることに夢中になった。

29

単行本と全集に収録された際に改稿が行われ、江田が無事に下山する設定となった。しかし、どっちにしても、江田の「完全犯罪」である殺人行為は、世に知られないことである。

『遭難』において、事件の真実は誰の口からも語られることができなかった。横田は遭難死した<sup>29</sup>ため、彼の解明した真相は世に知られることもなく、彼自身の死もまた偽りの言葉によって語られるだろう。メディアに公開された「真実」らしきものは、人間の「語り」によるものであり、錯綜した「語り」に対して懐疑を持って推理し、裏側を探ることがなければ、真実にも接近できない。このような方法は、『遭難』から読み取れるものであり、松本清張の文学に一貫する方法でもある。

このように比較してみると、『遭難』と『氷壁』は同じように遭難を取り入れ、登山者の内面を描いた小説でありながら、「アルピニズム」に対して正反対の見方であることがはっきりしてくる。『氷壁』は、「世間」と「山」の二項対立の中で、登山者が「山」に回帰していくことを書いた小説であるのに対して、『遭難』は、山という舞台を借りて「世間」を演出させた物語である。

本文の最初に紹介したように、1950年代の「登山ブーム」とは、登山人口が増加したことだけではなく、山岳書籍が多く出版されたことや、マス・メディアにおいて登山が多く語られていたことでもある。登山が「大衆化」していたともいえる。しかし、マス・メディアによる山岳の紹介や登山の物語に、多数が山岳者自身の言説によって行われていたにもかかわらず、山岳雑誌などにおいて、「マス・メディアの煽動によって無謀な登山者が増え、そのせいで遭難事故が多発した」という批判が常に行われていた。登山の「大衆化」に抵抗し、「アルピニスト」としての登山者の言説の権威性を維持するように、「アルピニズム」の思想が用いられる傾向がそうした批判の中で読み取れる。松本清張は、登山家から「岳人には悪い人はいない」という言葉を聞いて、そうした観念化された言葉に本当に悪はないのかと考えたことが、『遭難』のストーリーを構成するきっかけの一つでもあるが、この作品を通して、松本清張が同時代の「登山ブーム」における登山者の「語る」権威性に対して細やかな反発を見せていることも考えられる。

## おわりに

以上のように、遭難をめぐる多様の語りの中で、真実がどのように語られるかという角度から『氷壁』と『遭難』を読んでもみると、井上靖と松本清張の小説にまったく異なった表象が行われたことがわかった。『氷壁』は、マス・メディアによる語りの虚偽性を表象することによって、山岳者が語ったことの真実性を強調した。それに対して、

『遭難』から、真実に見えるところにも人間の悪が隠れている、疑いを持ってさらに裏側を追求しようという意欲が読み取れる。表象の違いは、同時代のメディアによって注目を集めた登山ブームに対する、井上靖と松本清張の見方の違いによるものであろう。井上靖が、事件の話題性だけを重視する報道メディアを批判的に捉え、メディアを操る、また翻弄される愚かな世の中と対立するように、魚津に崇高な人格を与え、詩情に溢れた文筆で彼らを描写し、世間から遠ざかる理想の存在を山岳者の中に見た。こうした理想は、井上文学に通底しているものであるとも考えられる。しかし、松本清張は、そのように粉飾されたアルピニズムの夢を否定した。岳人に悪い人はいないという観念に疑問を持つだけでなく、『遭難』において、新聞メディアも、登山者の言説も、疑わしいものとして描かれた。山は完全に世間から逸脱した楽園ではなく、人間と関わりを持った以上、山にも逃れられない人間関係の危険が潜んでいる。三段階の構造で語られた『遭難』の物語に、真実を究明するためには書かれた言説の裏側を探らなければいけないというメッセージがあるだけでなく、「登山ブーム」の中における登山者の言説の権威性に対する反発も読み取れる。

(本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

参考文献(引用したものは省略する)

- 諏訪多栄蔵『アルピニズム入門』、三笠書房、1957年5月。  
小山義治『穂高を愛して二十年』、新潮社、1961年8月。  
山崎安治『日本登山史』、白水社、1969年6月。  
長谷川泉『井上靖研究』、南窓社、1974年4月。  
渡辺公平「登山・遭難・ジャーナリズム」、『総合ジャーナリズム研究』、東京社、1974年10月。  
齊藤一男『岩と人日本岩壁登攀史』、東京新聞出版局、1975年6月。  
山岸郁子「水壁」、『国文学解釈と鑑賞 別冊』、1996年8月。  
竹内清己「『水壁』論―眼と場所の構図―」、『国文学解釈と鑑賞 別冊』、1996年8月。  
宮下啓三「山とスポーツ―ラスキンとアルピニズム、そして現代の登山の位相―」、『山岳』、日本山岳会、2005年。  
田村嘉勝『井上靖一人と文学』、勉誠出版、2007年6月。